巻/頭/言

コンテンツについて思うこと

Some Notes on Contents

笠原正雄
Masao Kasahara

21世紀はコンテンツの世紀といわれて久しい。コンテンツは文化的，教育的，産業的，政治的側面を持っており，諸外国に伍(ご)してこの分野で成功するか否かが，我が国の将来を明るくするか否かの鍵(かぎ)を握っている。このように国家にとっても非常に大切な意味を持つ“contents”に対する日本語は何であろうか。英和辞書で調べてみると，中味，内容，目次…などとなっている。しかし日常使用している“コンテンツ”とは，かなりずれがある。大切なことは字義的にとらえるのではなく，その本質をとらえるべく努力することであろう。

コンテンツの本質を考えること。一見難しいことのように思えるが，答えは意外に身近なところに書かれている。例えば“万葉集”の中に，“信濃なる千曲の川の細石(さざれし)も，君し踏みてば玉と拾わん”という歌が詠まれている。美しい感性が胸を打つが，この歌は私達にコンテンツ(シンボル，メディア)のあるべき姿を教えてくれる。つまり，⑴女性の年令は10代後半と思われ，この年令から外れるほどコンテンツとしての細石は不適切なものになること(要件１：コンテンツの良否は観賞者の年令による)，⑵細石は女性の完全に自由な意思のもとに置かれてコントロールされるべきこと(要件２：コンテンツは個人のペースで観賞されるべきもの)，ということを教えている。

万葉の代表的な歌人，大伴家持の歌に“妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ干(ひ)なくに”がある。亡くなった妹を想う家持の心が時を越えて私達の胸を打つ。しかし，この家持の歌を見て驚く人がいるかもしれない。何故なら家持よりも20年も前に山上憶良が“妹が見し楝(あふち)の花は散りぬべし我が泣く涙いまだひ干なくに”という歌を詠んでいるからである。二つの歌を見比べて，現代を生きる私達は著作権侵害？と考えるかもしれない。しかしこれは追和と言われる歌の形式であって，先人の詠んだ歌に美しい旋律がいつまでもこだまするように後世の人達が類歌を詠み，歌の心を伝えていくというものであって，著作権法とは無縁な美しい詩歌の世界なのである。

私の座右の書にシーザ父子に仕えた古代ローマの建築家ウィトルーウィウスが著した“建築書”がある。この本を紐(ひも)解いてみると，“紀元前３世紀エジプトの王プトレマイオスは，コンテンツの創出に全力を尽くし，その一環として詩文競技会を企画した。しかしある競技会で，一位，二位に入った二人の詩人の作品が盗作と判明し，厳しい処分がなされた。”とある。コンテンツは多様な側面を持つが，このような厳しい処分は，当時のプトレマイオス王朝ではコンテンツは政治的，教育的側面が強かったことを伺わせる。これに対し，万葉の時代では文化的側面が強かったと想像される。21世紀，コンテンツはどのような側面を強めるのであろうか。コンテンツの根源にかかわる国家的重要なテーマである。

細石がそうであったように，歌の世界ではシンボル(コンテンツ，メディア)は多くの場合，良きシンボルとして登場する。“このシンボルは良くないよ”という立場から読まれている例を万葉集の中に見出すことは非常に難しい。しかし，万葉の歌人の中でコミュニケーションの問題に大きな関心を寄せていたと思われる大伴家持の歌に“百千度(ももちたび)恋うというとも諸弟(もろと)らが練りの言羽は我は頼まじ”がある。坂上大嬢の愛の想いは，いくら練りに練った言葉で諸弟らによって伝えられてきても，それが伝言である限り良きシンボル(良きメディア)にはならないよ，こんなことを家持は主張している。

ところで，上記の歌にある言羽が言葉に改められたのは平安中期の柱本によるが，家持は言葉は散り落ちる葉っぱではなく，未来社会に向かって永遠に羽ばたきつづけるもの・・・と考えていたに違いない。

以上述べてきたように，コンテンツの本質について万葉集等の身近な存在から，その一端を知ることができる。

近年とみに重要性を増している“情報倫理”の本質も，身近にあるものから鮮やかに見えてくる。情報技術書，又は哲学書等では決して見えなかったことが鮮やかに見えてくる。不思議なことである。

◆大阪学院大学 情報学部 教授　Professor, Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University